

## テレビ朝ドラ『鳩子の海』についての評論

一般社団法人 洗楓座  
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事

佐藤建吉

感覚を、「原爆」、「第五福竜丸」で作られた「核アレルギー」としての懸念を背景として、政府と電力会社の二者と、自治体、地元組織、住民などの関係を、「鳩子の海」のストーリーと関連付けて上関を対象として事例研究している。

目的は、第一に原発誘致における日本の特徴である「根回し」の重要性、第二に原発の設置提案における地域と地元との複雑性、第三に現代日本の市民社会の自治体レベルの特性、を上げている。特に、『鳩子の海』に取り上げられた戦後から約30年の時代について、そのエンディングで取り上げた公害から逃れて郷里に戻った鳩子の心境と、3・11での原発の危険性からの回避を重ねている。

私は、2013年に、『鳩子の海』の上関をレンタカーで訪ねた。風光明媚な島影に、私はむしろ風車の立つ景色を想像した。いま、上関町の上盛山に風力発電が町営で実施される計画であるという。町議会での質問に対する町長の次の答弁を歓迎したい。「風力発電の計画は財源の確保が一番の目的で財政の安定を図り、町民の生活を守るサービスを維持していくために、今考える唯一の策だと思っ」



上関町の上盛山展望台付近(風車建設計画地)

テレビの持つ力は、どの国でも同じで大きいといえる。国により情報公開の規則や取り扱いに差はあるが、視聴者は、テレビの持つリアルな画像やリアルタイムの報道力に脱帽かもしれない。1964年の東京オリンピックに向けて日米での衛星放送の予行の際に飛び込んだきたJ・Fケネディ大統領の暗殺事件は、テレビのもつ報道力の実証であった。

米国の大統領選挙で、先述の東京オリンピックの10年後、1974年4月からNHKで放送された朝の連続ドラマは、『鳩子の海』であった。この番組が1年間の朝ドラの最後であったという

が、私はすでに学生や勤めをしていて、その全部は観ていないが、今回はその話題である。2011年の3・11後、イギリスの関わりで、インターネット検索していた折に、次のような論文に出会った。Hato ko Comes Home: Civil Society and Nuclear”

である。著者はマーティン・デューシンベとダニエル・アルドリッチの二人で、マーティンは、イギリスのニューカッスル大学の講師で、近代日本史を専攻とのことであ

る。それは、アジア研究ジャーナル誌(JAS)の2011年に掲載されているが、3・11の出来事を踏まえて執筆された長編の論文である。趣旨は『鳩子の海』と関連付けられた日本の歴史や政治についての論述であり、外国人による視点として興味深く思った。『鳩子の海』は、広島に原爆が投下され、山口県の岩徳線の鉄道線路上を一人でさまよう未就学の女の子(鳩子)を、連隊から逃れた脱走兵(天兵)が助けようとして二人が出会うところから始まる。鳩子は、その後、現在、原発の建設問題が有名な、山口県上関町で養育されるという設定である。「鳩子」は、平和を象徴する名前として養育先で名付けられた。彼女は、定時制高校を上る

る。同町の目の前にひがる海は、『鳩子の海』の舞台にもなった

卒業すると東京に暮らし、一緒に育った優子の紹介で、東海村原子力研究所に勤務する清久と結婚し、その地で暮らしながら、精神的に疲れ、家を出し離婚した。が、その後、清久の子を産み東京で育てた。当時は、公害が激しく、子供を守ろうと、郷里となった上関に戻って暮らすまでの鳩子や社会の機微が、そのストーリーである。それは、脚本家・林秀彦の作品であり、当時の深い社会情勢に由来し、大江健三郎の影響もあるという。番組制作に当たっては、ディレクターらが周到に議論しストーリーや場所を企画したという。その結果、『鳩子の海』は平均視聴率が47%を超え、同じく話題となった9年後の朝ドラの『おしん』に次ぐ高視聴率であった。

マーティンらの論文では、戦後の日本が、原子力発電の増大という歴史的背景を、日本と日本社会の文化や習慣を詳しく分析し評論している。それは、日本の戦略や攻略、あるいは対応についての切り口を学ぶことができる生きた教科書としてみる事ができる。マーティンは、日本の原子力発電に対する日本人の役割と影響について理解

愛する日本 緑の日本 青い海 日本よ日本 わしらが وطن まだ守れるぞ 時間はあらず どんどん



原発建設計画に翻弄される上関町。現在、同町の目の前にひがる海は、『鳩子の海』の舞台にもなった

た地方市民社会の歴史、役割と影響について理解

た地方市民社会の歴史、役割と影響について理解

た地方市民社会の歴史、役割と影響について理解